

命とは

特集

誰もが大切な命をもって生まれ
必要ない命など一つもない

思春期にある中学生。心身の発育や発達の変化によつて人間としての性を感じていく。次世代を生きる子どもたちに、自他の生命を大切に育んで育んで育んで、森田中学校の取り組みを紹介します。



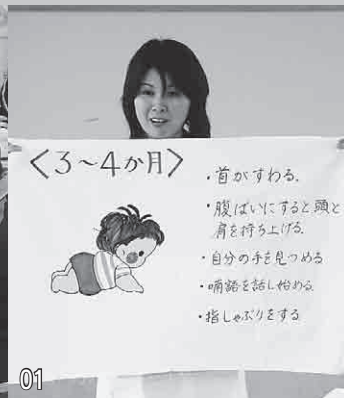
6月22日、森田中学校では、思春期教育の一環として生命の尊さを直接肌で感じ、将来の父性、母性の意識を育んでもらおうと2年生45人を対象に、「赤ちゃんふれあい教室」を森田保健福祉センター「あーすとぴあ」で開催しました。

同教室は、市健康推進課と連携しながら実施しているとともに、市内の生後約3カ月から1歳児ぐらいの赤ちゃんとお母さんにも協力してもらっています。この日は25組の親子の参加があり、生徒たちは各グループに分かれて緊張した面持ちで自己紹介をしていました。

2年生全員は、事前に沐浴人形を使って、抱っこ仕方、頭の支え方、オムツの交換方法などを保健師から指導を受けて本番に望みましたが、なかなか思い通りには行かず、悪戦苦闘していました。それながらも時間が経つにつれ、赤ちゃんといじれ合う生徒も多く見受けられるようになり、事前学習の成果が現れていました。

生徒たちは今回の体験を踏まえ、事後学習として自分たちで手作りのおもちゃを作って市内の保育所を訪問し、幼児たちと交流することになっているそうです。

- 01 赤ちゃんの成長過程を説明する外崎保健師
- 02 オムツの取り替え方を沐浴人形を使って指導する松橋保健師
- 03 首がすわる前の赤ちゃんの抱き方を指導する渡邊保健師



生徒一人ひとりが

自己肯定感をもてるように

今年で赴任して3年目になりますが、市内すべての中学校が思春期教育に取り組んでいることに驚いています。当校では、総合的な学習の時間を利用して2年生に思春期教育を学ぶカリキュラムを組んでいます。学習の最終的な狙いとしては、男性も女性もお互いを尊重し合い、生きることの喜びと命の大切さを感じさせることを目的としています。

また、2年生という時期は、年齢的にも性に興味を覚えて、いろんな事に芽生える時期でもあるので、ベターな年齢と思っています。

数十年前は、ほとんどの家庭で子どもが3人から5人ぐらいと今よりは多かったため、自然と家庭の中でお兄ちゃん、お姉ちゃんは、弟や妹の面倒をみていましたが、現在は少子化時代ということもあり、義務教育の中で生



長尾 勝幸 校長

命の大切さを教育しなければいけない時代になってしまいました。私たち教員は社会情勢が目まぐるしく変化する中、限られた時間で生徒たちが将来、大人として、親として生きていくためにどれだけの事を指導できるかが責務となっています。近い将来、つがる市で次世代を担う子どもたちのために、保育所（園）、小学校、中学校が連携し、この事業を継続していけたら、すばらしい事だと思いますね。



グループに分かれての自己紹介。よろしくお願いします。



坂田 志保 養護教諭

命の大切さを

学んでほしい

森田中学校では、平成6年から生徒たちに赤ちゃんとのふれあいを体験させています。生徒の中には、赤ちゃんを初めて抱っこする生徒もいて、「赤ちゃんって、重い。これが命の重さなんですね」と感想を話してくれます。思春期教育を通じての赤ちゃんとおれあう教室は、本番に向けて市の保健師さんと体験する生徒の性格や学校生

活での雰囲気などについて事前に打ち合わせをし、情報交換しながら意思統一を図って開催しています。

実際に生徒たちが赤ちゃんとおれあうまでには、助産師を講師に招いて、性についての知識を学習してもらい、自分自身も大切に育てられてきたことなどを学びます。その後、保健師の皆さんが、沐浴人形を使って生徒たちに赤ちゃんの抱き方、オムツの交換の仕方、着替えの仕方を指導し、本番に向けてのリハーサルを行っています。

生徒たちも事前に人形を使っの学習はしているものの、本番で赤ちゃんを抱っこしてみれば、赤ちゃんは泣くし、動かし、あやすのに四苦八苦していますね。

私は生徒たちがこの体験を通じて、生命の大切さと親への「ありがとう」という感謝の思いを、いつまでも持ち続けられる人になってくれることを願っています。



01



02



03

- 01 お母さんに教わりながらオムツ交換する男子生徒
- 02 なんてないちゃうの？せっかくおんぶしてるのに…
- 03 抱っこしてもらいのカメラ目線



将来のママを演じる女子生徒。
赤ちゃんの抱き方もなかなかさ
まになっていますね。

生まれてくれて「ありがとう」 産んでくれて「ありがとう」 命の重さを感じてほしい



木津 由美子 保健師

私たち保健師は、次世代を担う子どもたちのために、次世代育成計画や母子保健計画に沿って、虐待防止、親になる人の教育、性感染症を防ぐための指導等を行っています。

少子化時代の現在、保健師たちが懸念していることは、子どもの頃、赤ちゃんとき接したことの無い子どもが親になった時、どのように自分の赤ちゃんとき接すればよいかかわらず、虐待やネグレクト※1に走る親が少なくないことです。このような現象は絶対にあってはいけないことで、関係部署が連携を密にして取り組んでいかなければいけない大きな問題です。

「継続は力なり」という言葉がありますが、毎年、中学生に赤ちゃんとお母さんに触れ合う機会を与えることで、教室に参加した生徒が「命」というものを大事にして、自分がどれほど大切に育てられてきたかを感じてほしいと思います。やがて自分の子どもが生まれた時、「あの頃の体験が役にたった」と思ってもらえたなら、事業の効果があったのかなと思います。

思春期教室や赤ちゃんふれあい教室は、今後も継続したいと考えていますが、行政主導型の一方通行では何の意味も無く、学校サイドの協力と受入体制がなくてはできません。

学校の学習指導要領などが改正になると事業への取り組み方も変わっていくと思いますが、学校からの要望は出来る限り受け入れて、次世代を担う子ども達のために、サポートしていきたいと思っています。

※1 ネグレクト：乳幼児に対して適切な養護を親が放棄すること（育児放棄）



安齋レディスクリニック

福井 りみ子 助産師

思春期を迎えた中学生は、性について当然興味をもつ年頃です。生徒たちが初めて親になったとき、「命はリセットできないもの」「命はかけがえのないもの」であることをわかってもらうためにも、私は、講演の機会があるたび、性行動に伴う3大リスク（①性感染症②望まない妊娠③人生設計の変更）を避けることを話しています。



■参加したお母さんを代表して

渋谷 直美さん

（歩夢ちゃん（女）6カ月17日）

私は13年前の中学生の時、赤ちゃんふれあい教室に参加しました。あの頃の体験が、母親になった自分にとつて、とても役に立っています。今日は子を持つ母親として参加でき、とてもうれしく思っています。生徒の皆さん、今日の体験を生かして良き親になってください。

■参加した「お母さんの声」

台丸谷 美智子さん

（果凜ちゃん（女）2カ月27日）

自分の子供もいずれは、中学生になります。その時に赤ちゃんとき触れ合う経験をさせたいので、今回参加してみました。子育てはお互い様。みんなが健やかに成長することを祈っています。

相馬 淳子さん

（采奈ちゃん（女）8カ月4日）

今の中学生は赤ちゃんとき触れ合う機会が少なく思っています。赤ちゃんが歩けるようになる前に触れ合ってもらおうと親子で参加しました。

インタビュー